聖霊降臨後第４主日（特定７）　　エレミヤの告白　　２０２３．６．２５．

今日の福音書は、イエス様が弟子たちを伝道に遣わすにあたって、彼らが受ける迫害について、それを恐れないで、堂々と語りなさい、と言われたところです。このテーマを説明するために、今日の旧約聖書にはエレミヤ書の「エレミヤの告白」という有名なお話が選ばれています。

ただ、参考にするには、あまりに衝撃的な告白ですので、今日は預言者エレミヤのことを中心にして、話そうと思います。

イエス様が生まれる７００年位前、イスラエルの国は南北に分かれて、もう北のイスラエル王国はアッシリアという外国の軍隊によって滅ぼされていました。それから１００年くらい過ぎた頃、南ユダ王国のエルサレムに近いアナトトという町に、祭司ヒルキヤの息子、エレミヤという若者がいたのです。

彼の父は神殿で働く祭司でしたから、エレミヤもその仕事を引き継ぐ祭司になると思っていました。ところが神様は、このエレミヤに向かって、「わたしはあなたを母の胎内に造る前からあなたを知っていた。母の胎から生まれる前にわたしはあなたを聖別し、諸国民の預言者として立てた。」と言うのです。

こう言われたエレミヤは、驚いて、「自分は、何の経験もない若者に過ぎません。何を語ればいいのか、わかりません。」と神様の呼びかけに戸惑ってしまいました。

ところが、神様は「若者にすぎないと言ってはならない。わたしがあなたを、だれのところへ遣わそうとも、行って、わたしが命じることをすべて語れ。彼らを恐れるな。わたしがあなたと共にいて、必ず救い出す。」このように約束されたのです。

そして、そのあと、神様がこう言われました。「見よ、わたしはあなたの口にわたしの言葉を授ける。見よ、今日、あなたに諸国民、諸王国に対する権威をゆだねる。抜き、壊し、滅ぼし、破壊し、あるいは建て、植えるために。」

どうも穏やかな話ではなさそうです。これが第１章で、エレミヤが預言者に召された時の出来事です。

しかし、エレミヤは神様からの言葉を喜んで口に入れていたことを語っているところがあります。

１５章です。『16 あなたの御言葉が見いだされたとき／わたしはそれをむさぼり食べました。あなたの御言葉は、わたしのものとなり／わたしの心は喜び躍りました。万軍の神、主よ。わたしはあなたの御名をもって／呼ばれている者です。』

ところが、彼の口に入ったみ言葉は、エレミヤが口から出す時、人々から迫害され、エレミヤは苦しみました。それは、神様の言葉が、人々を不安に陥れるもののように受け取られたからです。

今日読まれたエレミヤの告白の箇所は、２０章ですが、その直接の原因は、１９章に出てきます。

１９章の最初には、「砕かれた壺」という見出しがついています。エレミヤは神様から言われて、壺を買いにゆくことになります。そして買った壺を持って、エルサレムの長老や祭司たち、つまり指導者たちを引き連れて、町の南側にある陶片の門というところから出て、南側にあるゴミ捨てのようなベンヒンノムの谷へ行って、買ってきた壺を砕け、というのです。

そして、神様は、「私の言うことを聞かないで、他の神々に礼拝を捧げている、エルサレムの指導者たちをこの壺のように砕く。そうしたら、一度砕かれた陶器の壺が元に戻らないように、このエルサレムの民を砕くことになる。」と言われ、それをエレミヤに語るように促されるのです。

これを、指導者たちに語り、壺を砕いたエレミヤは、今度はエルサレムの一番高いところにある、神殿の庭に立って、このように言いました。

『15 「イスラエルの神、万軍の主はこう言われる。見よ、わたしはこの都と、それに属するすべての町々に、わたしが告げたすべての災いをもたらす。彼らはうなじを固くし、わたしの言葉に聞き従おうとしなかったからだ。」』

ここまでが、１９章の出来事でした。すると、『エレミヤは、神様の神殿の秩序を乱す者だ』、ということで、パシュフルという神殿の監督をしている祭司がエレミヤを逮捕して、都の北東部にあるベニヤミン門という神殿に捧げものをするために人々が出入りする門のところに拘留して、みんなからさらし者にされるように、一晩置かれるのです。

ところが、エレミヤは翌日、拘留が解かれると、彼は、逮捕したパシュフルに向かって、滅びの預言をします。長いので最後だけ引用しますが。

『6 パシュフルよ、お前は一族の者と共に、捕らえられて行き、バビロンに行って死に、そこに葬られる。お前も、お前の偽りの預言を聞いた親しい者らも共に。』

このような、やり取りがあった後で、このエレミヤの告白が出てくるのです。

彼が神殿の丘で逮捕され、神殿への入り口の門のところで、一晩さらし者にされたつらさが表現されています。人々のあざけりに苦しめられたことが切々と語られています。エレミヤ自身は、そんな生活が嫌なので、黙っていたいのに、神様からの言葉が、口に出てくるのを自分には止められないことが、９節から語られます。

『9 主の名を口にすまい／もうその名によって語るまい、と思っても／主の言葉は、わたしの心の中／骨の中に閉じ込められて／火のように燃え上がります。押さえつけておこうとして／わたしは疲れ果てました。わたしの負けです。』

そんなことを嘆いた後で、それでも神様は私と共にいてくださって、最後は、あの召命の時に約束してくださったように、助け出してくださるのだ、という信頼が最後に出てきます。

『11 しかし主は、恐るべき勇士として／わたしと共にいます。それゆえ、わたしを迫害する者はつまずき／勝つことを得ず、成功することなく／甚だしく辱めを受ける。それは忘れられることのない／とこしえの恥辱である。』
『13 主に向かって歌い、主を賛美せよ。主は貧しい人の魂を／悪事を謀る者の手から助け出される。』

結局、エレミヤは、神様の都であるエルサレムが預言どおり、滅ぼされるのを目の当たりにします。しかし、都が滅ぼされてのちに、新たにエルサレムが復興されることを預言しています。

今日は、本当は福音書の、イエス様が弟子たちを派遣する時の、敵対する者たちを恐れないように、というお話が中心ですが、あえて、エレミヤを取り上げました。

ある牧師さんは、このエレミヤの逮捕と彼の告白の箇所について、こんなことを言っています。

『宗教家のおちいる一つの誘惑は、人の耳に心地よい言葉を語り、人気を博し賞賛され、敬愛の念でかこまれることを求めてしまうことである。語っていることが神のみ旨であるかということよりも、人に喜ばれるかどうかを無意識のうちに意識しやすい。

そういう面で、神殿監督者の祭司パシュフルはエレミヤの預言に迷惑を感じたのであろう。人心を攪乱し、平和に生活している人たちに恐れの念を起させる有害な人であるとして、エレミヤを捕え、ベニヤミンの門につないだ。そして一日中、宮もうでに来る人の目にさらされ、人々からののしられ、あざけられ、辱められたのである。

エレミヤは、神が語れと言われたから語っているのである。人の評判を気にしている祭司パシュフルとは立っている場所が違うのである。』

もう、この牧師の文章で十分でしょうが、教会の牧師は、しばしば神様のみ旨よりも、人々の評判を気にして、言うべきことを言わないで終わっているのではないか、と思うことがあります。

イエス様が弟子たちに、派遣先での迫害を恐れないように指示されたこと。そして、エレミヤが自分の感情とは別に、神様のみ言葉に突き動かされたことを、肝に銘じて、御心が行われるように、神の国のために働くものでありたいと思います。